

第18回南のシナリオ大賞

優秀賞

フアスナー

岸朋楽

「フアスナー」 あらすじ

福岡の大学に進学した池崎勇人(19)の元に遠距離恋愛中の彼女・岡田志穂(19)が訪ねてくる。二人が夜を共にすべく素肌を晒した時、勇人はある事実に気づいてしまう。志穂の背中にフアスナーが付いているのだ。志穂にその事実を問えぬまま半信半疑の勇人だったが、ある想いで一杯になってしまう。「フアスナーを下ろして中を見たい」。

風呂場を覗こうとしたり、高校時代の親友に電話したりして、志穂のフアスナーを探ろうとする勇人だが、全く上手くいかない。

ところが、志穂が寝静まった深夜、遂にフアスナーを下ろすチャンスを得る。躊躇いながらも志穂の背中に手を伸ばす勇人。漸く下ろせた——とした瞬間、目が覚める。勇人は志穂を待っている間に寝てしまっていたのだ。夢だったか、と思い至る勇人に対し、志穂は慄然とする一言を告げるのだった。

SE 旅行鞆のフアスナーを開ける音。

志穂「それ私の鞆、勝手に開けない！」

勇人「ごめんごめん。荷ほどき必要になって」

志穂「荷物なんか後でいいからさ、見て、勇人。すっごい景色。こっからタワーも見えるよ。ライトアップされて綺麗！」

勇人M「僕が福岡の大学に進学した事で遠距離恋愛になっている僕ら。今日、休みを利用して彼女が旅行がてら訪ねてきてくれた」

志穂「この部屋高くなかった？ 晩御飯もい

いとこだったし……無理してない？」

勇人「志穂が福岡まで来てくれたんだよ？ 彼氏らしいとこみせないと」

志穂「へーカッコつけるじゃん、彼氏さん！」

勇人M「神様、僕は今日人生最高の夜を迎えます！ 遂に遂に、志穂と結ばれるんだ！」

登場人物

池崎 勇人(19)

岡田 志穂(19)

戸塚 璃子(19)

SE ベッドに倒れ込む音

志穂「ちよつと待つて。慌てないでよ、勇人！」

勇人「駄目？」

志穂「まだ9時だよ？ 夜は始まったばかりじゃあ。もう少しさ、まつたりしたり——」

SE 衣擦れの音

志穂「わかった、わかったから。もう、くすぐったいって」

勇人M「その潤んだ瞳も赤い唇も絹のような

肌もこの手で……ん、何だこれ？」

志穂「どうかした？」

勇人M「この感触……下着姿の志穂の背中に

固い何かが……」

志穂「ねえ、どうしたのって」

勇人M「何だこれ？ 固い金属が重なったよ
うな凹凸がある」

志穂「ねえってば！」

勇人「あ、いや、ドキドキしちゃって。志穂
が、その……綺麗で」

志穂「ホント？ 私の心臓もバクバクしてる」

勇人M「そんな事より、この感じ触った事が
あるな。これ、ひよとして……」

志穂「じゃあ、もつとギュツとして」

勇人M「これ、ファスナーじゃないか！ 志
穂のうなじ辺りの皮膚にファスナーが！」

勇人「えつと、そう！ 後ろからハグさせて」

志穂「えーいいけど……」

勇人M「嘘だろ！ やっぱり銀色のファスナ
ーがうなじから腰のあたりにまで。特撮の
着ぐるみみたいに！」

志穂「まーた黙り込んで」

勇人「えつと……尊いなって……思ってる」

勇人M「志穂はわかってないのか？ それと
もドッキリ……僕は何か試されてる？」

志穂「ね、ギュツとしてよ」

勇人「う、うん」

勇人M「後ろから抱きしめると僕の胸にファ
スナーが触れる。この固さ冷たさ、本物だ」

志穂「ちよつと勇人、強い。痛いよ」

勇人「あ、ご、ごめん」

勇人M 「タトウー、オシヤレ？まさか！肌
に直接着いてんだぞ」

勇人M 「浴室のドアは半透明で中がぼんやり
見えるだけだ」

SE ドアの取っ手を勢いよく下ろす
が、鍵がかかって開かない

志穂 「もーそんなに強く抱きしめなくても、

勇人 「バスタオル、ここあるからね」

勇人 「か、鍵！」

私は逃げないから、どこにもさ」

志穂 「浴室のドア越しにありがとー」

勇人 「そう……だよね」

SE ドアの取っ手に手をかける

勇人M 「その瞬間、黒い何かが志穂の背中に
入り込んでいくように見えた」

勇人M 「やばい。ファスナーの中が気になっ
て、それどころじゃない。中はどうなっ
てる？ 中身があったりするの？」

勇人M 「ドアを開けてみるぐらいいいよな？
彼氏なんだから、いいよな？」

志穂 「ちよつと止めて、開けないで！ シャ
ワー浴びてるんだから」

志穂 「さ、これくらいにして、私、先にシャ
ワー浴びるね。あ、覗いちやダメだから

SE シャワーヘッドが落ちた音

勇人 「ご、ごめん。大丈夫かなって」
志穂 「大丈夫！ 水の勢いが強くてシャワー
落としただけだから」

ね！」

勇人 「そんな事……しないよ」

勇人M 「今、何か黒いのが動いた！ 志穂の
背中辺り！」

勇人 「そう……気をつけてね」

勇人M 「気になる……下ろしたい！ ファス
ナーを下ろしてみたいッ！」

勇人 「志穂、志穂！」

勇人M 「あれは見間違いか？ 志穂は一体、
どうなってるんだ……」

SE 扉が閉まり、シャワーの音

SE 携帯電話のコール音

戸塚(電話・以降同)「はい。もしもし」

勇人「あ、戸塚? 今、電話大丈夫?」

戸塚「勇人じゃん! おひさ。あれ、今日

志穂がそっち行っただけじゃないの?」

勇人「そうなんだけど、今シャワー入っただけ。

それよか、ちょっと聞いて欲しいことがある

ってさ、戸塚に電話したんだよ」

戸塚「正直、のろけは聞きたくないなあ」

勇人「そうじゃなくて! 最近さ、志穂変わ

ったとこない?」

戸塚「変わったとこ? あー勇人が福岡の生

活の話してくれないって、愚痴ってたよ」

勇人「それは俺が悪いんだけど……でも、あ

るでしょ。ほら、背中とかさ」

戸塚「背中? 志穂の背中がどうしたの?」

勇人「いや、その……」

戸塚「あ、わかった! 志穂の背中が意外と

毛深かった。そうでしょ?」

勇人「そんな事で電話するか! じゃああれ

だ。高校のプールの授業、志穂どうしてた?」

戸塚「何その質問。キモッ」

勇人「大事な話なんだよ!」

戸塚「えー普通に受けてたと思うけど」

勇人「背中は何?」

戸塚「だから、さっきから何? 背中?」

勇人「んーじゃあ……も、もしもだよ、志穂

の背中にファスナーがあつたらどうす

る?」

戸塚「大喜利? 難しいなあ」

勇人「そうじゃない! そうじゃなくて」

戸塚「あつ! 心理テストか!」

勇人「本当の話! 志穂の背中にファスナー

が付いてんだよ! 地肌に! 直に!」

戸塚「……そのギャグいまいちだよ」

勇人「(溜息)だから——」

戸塚「あはは。わかった、わかった。じゃ、

仮にその話が本当だととして——」

勇人「うん」

戸塚「(雰囲気が変わり)何で私に話した?」

勇人「何でって……え?」

戸塚「志穂は勇人を信頼して親友の私も知らない秘密を晒した」

勇人「……それは」

戸塚「でも勇人は私に言っちゃった。自分が

怖いから、不安だから、気になるから」

勇人「そうだけど……誰だっただけでそんなとこ見

たらビビって相談したくなるだろ、普通さ」

戸塚「じゃあ、もし私がこう言ったら?」

勇人「え?」

戸塚「私の背中にもあるよ、ファスナー」

勇人「そ……それは」

戸塚「……うってかわって大笑い)んなわけ

ないじゃん。常識的に考えて」

勇人「……け、けど」

戸塚「用事なんでこの辺で。妄想も程々にね」

勇人「ちよつと、待って」

SE 携帯電話が切られる

勇人M「自分の背中に触れてみる。あるべき

場所に皮膚とその奥の骨の感覚。そりや、
そうだと、普通はそうなんだよ！

勇人M「志穂はまだぐっすり。もしファスナ
ーを下ろすなら、今か」

密をさ、勝手に晒すなんて」

SE ベッドに座り込み、きしむ音

SE 衣擦れの音

勇人M「でも、ファスナーはすぐそこ。ほん
のちよっと手を差し入れてみれば」

テレビを点け、音が入る

『今夜の世界ミステリー
はフアラオの呪いです。
これは——』

勇人M「バスローブの襟元をそっと引つ張つ
てみる。やっぱりだ。月明りが志穂のうな
じの銀色ファスナーを照らす」

勇人M「ファスナーを下ろして、見たらすぐ
に戻せばいいだけだ。だよな、な？」

勇人M「時間は10時にもなっていない。くそ
っ、何でこんな事に——」

SE ベッドがきしむ音

勇人M「ま、待て。中身があればまだいい。

怖いのはない時だ。もし中が空なら志穂は
ガワだけの……。でも、やっぱり見たい。
見てみたい」

SE テレビのホワイトノイズ

勇人M「待て待て。駄目だろそんな事。少な
くともちゃんと話し合ってから——」

SE 衣擦れの音

勇人M「ふと気づくと部屋が暗くなっていた。
志穂を待つ間に僕はベッドで眠ってしま
っていたらしい。隣を見ると志穂が僕に背
を向けバスローブ姿で寝息を立てている」

SE ファスナーがゆっくり開く音

勇人M「え！今、ファスナーの音が……気
のせいかな。いよいよ幻聴かよ」

勇人M「そら、手を伸ばして。後はこのファ
スナーを下ろせば——」

SE ホワイトノイズが高まって

志穂「(寝息)」

勇人M「戸塚も言ってたじゃないか、人の秘

志穂「ねえ、勇人、勇人ってば！起きて」

勇人「え、ああ」

志穂「もーつ、自分だけ寝落ちしてえ！」

勇人「え、寝落ち？ 今、何時？」

SE テレビからの音声

『それがこの呪いの真相でした』

志穂「まだ10時過ぎ！」

勇人「10時？ 深夜じゃなくて？」

志穂「ちよつとシャワー長めだったけど、彼

女ほつて寝る事はないよねえ」

勇人M「志穂は部屋着姿でちよこんと座つていて、ここから背中中は確認出来ないけど、フアスナーも、下ろしたのも……夢？」

志穂「まーたぶつぶつ言つて」

勇人「ね、志穂さ……」

志穂「なに？」

勇人「隠し事とかしてないよね？」

志穂「えー最悪、雰囲気ぶち壊しー」

勇人「そうじゃなくて……えつと、フア……」

志穂「フア？」

勇人「フア、フアラオの呪い！ エジプトの発掘調査隊が不審死した事件。あれ事実が誇張された都市伝説だって、今テレビで

志穂「やだ！ 止めて。呪いとか死ぬとか」

勇人「そうだよね、ごめんごめん。変な夢見 てたからおかしな事言っちゃた！」

志穂「でもさ……」

勇人「ん？」

志穂「土足で他人の秘密を暴いた人間が相應の報いを受けるつて、いい教訓じゃない？」

勇人「……志穂？」

志穂「それでも勇人は本当に——」

勇人「え……」

志穂「覗いてみる？」

SE フアスナーを開く音

おわり